

血縁を超えた家<イエ>族の集住体

原田 豊嘉 (指導教員 八尾 廣)

1 はじめに

現在私たちは、自分で自由にライフスタイルを決められる世の中に生きている。それは、シェアハウスに代表されるような、他人同士が一つの空間を共有するという住み方からも見て取ることができる。私はここに、その住み方の新しい可能性を提案する。

2 敷地

広島県広島市中区基町。広島市の中心地にほど近い場所に位置し、近くには大型の集合住宅、保育園や小学校があり、多くの人々が住んでいる。また、敷地周辺には自然が多く残る公園が点在している。



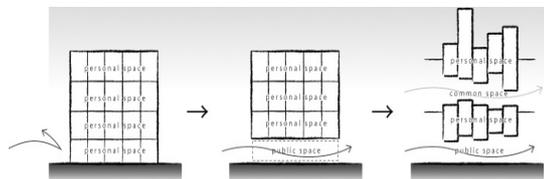
3 計画

3.1 連続性(散歩道)

中央公園のランドスケープが敷地内に流れ込んでくるイメージで散歩道を作り、公園と広場に連続性を持たせることで、都市におけるオープンスペースのネットワーク化をはかる。

3.2 連続性(ボリューム)

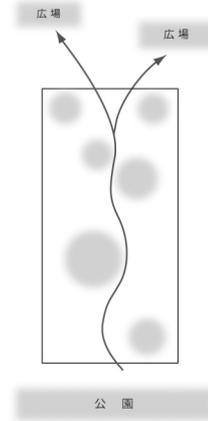
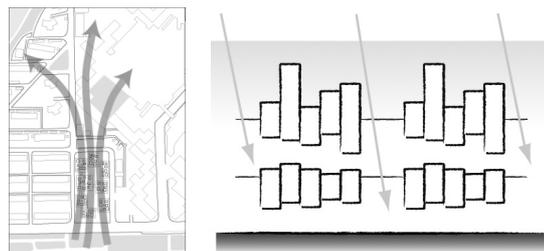
一層部分のボリュームを持ち上げ、各住戸を上下左右に引き伸ばす。上下の住戸に挟まれた空間は、住人のための開放的なCOMMONスペースとなる。



3.3 すき間

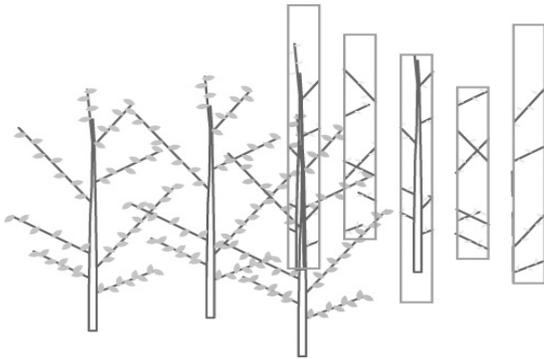
中央公園から運ばれてくる風が敷地に流れ込む。四季の香りや音を感じ、各棟に外気を積極的に取り入れる。

また、各棟にすき間を空けて配置することで、敷地内に光を多く取り入れることができる。



3.4 パターン

周囲に自然を多く感じることができる場所。周辺環境に対立しない建築、自然と一体となる建築を目指した。反射性のあるルーバーに映り込む自然は、建物全体を包み込み、周りの自然に溶け込む。また、無機質な RC に豊かな表情をつける。

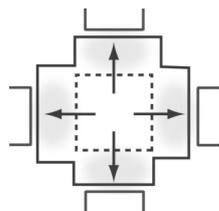


3.5 中間領域

最小限の生活スペースとして設計された住戸に中間領域を設け、これを一つのユニットとして上下左右に並べ、COMMONスペースでつなぎ合わせる。中間領域については、住人によって開き方にバリエーションが出てくる。

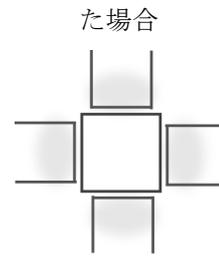


(1) 中間領域がCOMMONスペースに向けて開けた使い方をされた場合



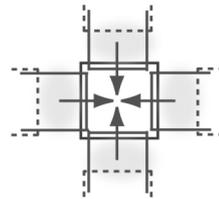
COMMONスペースと中間領域が一つの空間になりやすい

(2) 中間領域が閉ざされた空間として使われた場合



COMMONスペースとの関係性が乏しくなり、中間領域は住戸として機能する

(3) 住戸がCOMMONスペースに向けて開けた使い方をされた場合



住戸内の生活形態が中間領域を介してCOMMONスペースに溢れ出す

4 発展

各棟にそれぞれ別の生活形態が生まれる。隣り合う棟がブリッジによってつながり合い、生活形態のネットワークができ始める。さらに、敷地をまたぐ都市におけるオープンスペースのネットワークと、生活形態のネットワークが敷地内で混ざり合い、将来この場所が、地域という家族の団らんのようなまちのリビングと呼べる場所になっていく。

5 おわりに

ライフスタイルが細分化し、より個人主体になってきた現代において、集まって住むことの新たな可能性を示し、卒業設計とした。